

〈特集・労働者協同組合グループ〉

環境・くらし——洗濯機づくり

佐藤 弘子 (私たちの洗濯機づくり研究会会員)

なぜ洗濯機を？

「洗濯機を作るんです」というと、「え！」と言ってこちらの言っていることが理解できない面持ちでだまってしまうか、「なぜ洗濯機なの？」と疑問形になるか、ほとんどの反応はこのふたとおりで返ってくる。

どの家庭でも日常当たり前の行為として洗濯が行われ、巷には多種多様の洗濯機が出回っている。「今さら洗濯機？」「なぜ？」ももっともな気がする。が、しかし、私ごとではあるがその昔、おむつ洗いで手荒れに困って合成洗剤から石けんに切り替えて20年あまり、洗濯機への不満はずっと持ち続けていた。

一方的に作り出される物が洪水のように溢れている中での選択を、決して、豊かとか自由とかではないと思いつつ、食べ物の産直と違って、自分たちのほしい電気製品を作るなどということは思いつかなかった。物に自分たちの生活を合わせてきたといえる。

日本石けん洗剤工業会の『日本の家庭洗濯の実態と最近の変化』という調査に、「最近の洗濯機の大型化がさらに洗濯物を増加させている」とある。どうやら人は意識するしないにかかわらず、洗濯機に入るならもう少し入れて回そうとわざわざ洗濯物を捜す行為にでるらしい。こうして洗濯機は大型化し、水も洗剤も減らす方向へは働かず、環境汚染と合成洗剤メーカーの成長とが連綿と続いている。

合成洗剤は第1次世界大戦中ドイツで開発され、第2次世界大戦後アメリカが大量生産に成功。日本でも1950年代から洗濯機の普及と相まって消費量が増大し、'62年には合成洗剤と石けんの消費量が逆転、'90年には7:1の比率まで開いてしまった。この間、合成洗剤の環境汚染が問題にさ

れ、'60年代には自然界での難分解性のためABS(合成洗剤の主要界面活性剤)からLASへの切り替え、'70年代にはりん酸塩による河川・湖沼の富栄養化が問題になり無りん化された。さらにLASも生体や環境への影響に疑問が出されている。合成洗剤の有害性が言われ続けられているにもかかわらず、依然として使用量は増え続けるばかりである。

ここで浮上したのが、日本の攪拌式や渦巻式の洗濯機より水も洗剤も少なくすむ(1/2)というヨーロッパ型の《ドラム式洗濯機》であった。何よりも環境への負担を少なくしたいと…。

『私たちの洗濯機づくり研究会』の流れ

そもそも洗濯機作りの話をタウ技研の都筑さんに持ち込んだのは、千葉の企業組合ワーカーズコレクティブの山内さんとかなる舎(電気屋)の高原さん。

'91.9『私たちの洗濯機づくり研究会』が発足し、'93.4まで18回の会合を重ねてきた。最初は5~6人だったというが、次第にいろいろな分野の人へと広がり、月1回の会合は20人を超す集まりとなっている。職種・経歴様々な人の集まりは研究会の中の広さであり、それがまた魅力でもある。この間、「石けんと洗濯機」をはじめとする学習会、アンケート調査、ドラム式洗濯機の体験、特許・意匠登録等に関する調査、などを経過して、今、技術関係者の手によって、原理機、ができてきた。性能テストの準備、洗濯機研究会の記録づくり、そしてニュース『たらい回し』の発行がされている。

生活を科学する

洗濯機の形態や機能を定める段階での話し合いは、実に様々な各人の思い入れがあってなかなか

おもしろいものがあった。こと洗濯に関しては、洗濯機が洗濯してくれるという単純なことではなく、各自各家庭のスタイルは日常的なことゆえに、頑固というか、生活思想とっていいほど形づくられている。その上、今まで洗濯の仕方を人と比較するということはほとんどなかったといえる。そういった中での話し合いは、行きつもどりつ、とりとめがないようであり、その中から共通理解を生み出しながら形態や機能が絞られていく大切な過程でもあった。大量生産・大量消費にどっぷりつかからない生活保守主義は大切にしていきたいと思う。

とはいえそれぞれが、毎日どれくらいの洗濯物を、どれくらいの水を消費（すぎの仕方によってはかなりの差がでる）し、どれくらいの時間をかけてやっているのか、ほとんど確かめることはしない。まず、自分の行為を意識的に計り、`洗う、`ということはどういうことかを知ることから始める必要があった。

日常生活の視点を大切にし、しかも、それが世の中の大きな流れの中にどう組み込まれ、どう影響を受けているかにも、絶えず目を向けなければならない。

科学・技術の中に生活感覚を

今の世の中たくさんものが溢れているが、生産と消費がこんなにも切り離され、見えなくなってしまったのはいつからだろうか。いつも消費する側において、細分化され専門化された技術というものに、手出し、口出し、挑戦はできないものと思いついてきたといえる。「技術も知識もないものに何ができるか」と問われればとっさに答えるすべもないが、トータルな人間としての生き方は別のところで、技術が技術を呼び、科学がさらに科学を呼び、そこにお金がかからみ、人間の存在が疎外され、その果てに公害や環境汚染が現われたといえないだろうか。

洗濯機づくりも、生活という日常にへばりついた視点から関わっていきいたと思うのは、自分たちがほんとうに必要とするものは、生産と消費が

結び付いたところではじめて作りだされると思えるからこそである。生産者も同じ生活者ですもの。

こんなことを考えていた矢先、4月17日付け毎日新聞の新聞時評に作家の森崎和江さんが『家庭は消費単位にすぎないか』というタイトルで「政治や経済の分野で激動が続き、各分野での新方式が求められ、試みられるのを見ます。でも大きく区分して、産業界・経済界とその消費単位としての家庭とが、あたかも社会的役割分担を負っているかのように分断され…（中略）いのちに関するあらゆることを家庭が分担しているのに、経済界からは消費単位にすぎないのが新聞にありありと読める。しかも、いのちをおびやかすものの内部に、人間像がない。そろそろこの区分法を変えたい思いです。」と書かれてあり、思わずうなずいてしまった。

今後へ向けて

さて、かんじんの洗濯機の今後であるが、タウ技研を中心とした技術関係者の手によって原理機が作られ、性能テストを重ねた上、5月末の合成洗剤研究会事前セミナーではプロトタイプ機を、8月には念願の《ドラム式洗濯機》の公開が予定されている。

様々な試行錯誤を経ながら、《ドラム式洗濯機》は現実の形へと近づいている。環境を汚さずに人間は生きられないが、かしこく共存していく力もまた、もっているはず。環境への負担を少なくし、長く大切に使い続けられるものを生み出したい。そのための製造、販売、保守を含めた組織のあり方も考えなければならない。

こうした新しい物づくりのあり方は、絶対これという方法があるわけではない。ひとつひとつ手さぐりで、`協同、`とは何かを実践の場で確かめていきたいと思っている。